

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成23年5月24日現在

機関番号： 24403
 研究種目： 基盤研究（c）
 研究期間： 2009-2011
 課題番号： 21530184
 研究課題名（和文）ボウレイとレイトンの統計学方法論の研究
 —マーシャル経済学の展開とその応用—
 研究課題名（英文）The study of statistical methodology on Bowley and Layton: The
 development and application of Marshall's economics
 研究代表者 近藤 真司（KONDO MASASHI）
 大阪府立大学・経済学部・教授
 研究者番号： 50264817

研究成果の概要（和文）：

ボウレイとレイトンはマーシャルの経済学と方法論を学び、当時の重要な研究テーマで彼が十分具体化できなかった応用経済学の分野に業績を残したことを明らかにした。ボウレイとレイトンの研究業績は、マーシャル経済学の現実への応用と経済学における統計的の開拓である。両者の統計学法論を考察することにより、ケンブリッジ学派の創設者として現代の経済理論の基礎を構築したマーシャルとは別の応用経済学に関心を持っていた彼の経済像を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

Bowley and Layton had studied Marshall economic and his methodology, and applied it to their statistical works. They were the successor of Marshall's approach to applied economics at Cambridge School, and such they contributed to the subject. However, applied economics and statistical economics continuing the Marshallian tradition has not been sufficiently examined. This study made clear to Bowley and Layton's place in this Marshallian tradition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：ケンブリッジ学派，ボウレイ，レイトン，マーシャル，統計学方法論，経済学方法論，ロンドン大学（LSE），ケンブリッジ大学

1. 研究開始当初の背景

アルフレッド・マーシャルは、ケンブリッジ学派の創設者として現代の経済理論の基礎を構築した人物として知られている。彼は、応用経済学の分野にも関心を持ち、自らの経済学の体系において重要な足跡を残している。しかし、この点に関してはマーシャル経済学の中で主要なものであるという位置づけは十分になされていない。また、マーシャルの下で教育を受け、理論的側面に貢献した人物としてケインズやピグーが存在するが、応用経済学の分野において貢献した人物にも注目する必要がある。

マーシャルの応用経済学側面並びにマーシャルとレイトンの関係についてこれまで研究を主として行ってきた。その過程において、マーシャルの統計学への貢献ならびに応用経済学の後継者について明らかにする必要性が出てきた。統計の役割を重要視していた経済学者としてはマーシャルとジェヴォンズがあげられる。

マーシャルは、「統計のグラフ的方法」(1885年)という論文などにも現実把握のために、また彼の著作の至る所で統計研究の重要性とその必要性を述べている。数理経済学の発展に大いに貢献したボウレイであるが、マーシャルはエッジワースはじめ多くの経済学者に、数学を経済学に使うときには慎重になるように助言していることはよく知られている。そこで、マーシャルの統計学的貢献とボウレイとレイトンの統計学方法論との関係について考察することが重要になってくる。

2. 研究の目的

本研究では1919年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(以下LSE)で最初の統計学の教授になったアーサー・レオン・ボウレイ(Arthur Lyon Bowley, 1869-1957)とケンブリッジ大学で創設した経済学トライポス(卒業試験)で最初に第1優等生の学位を取得し、ケインズと同じ年にケンブリッジで講師になったウォルター・レイトン(Walter T. Layton, 1884-1966)の統計学方法論をとりあげた。

ボウレイは数学を勉強していたが、アルフレッド・マーシャルの影響を受け社会改革との関連から経済学の研究を始め、その後ディング大学を経てLSEの教授になる。レイトンはケンブリッジで応用経済学を担い、統計学的手法を取り入れた『物価研究入門』(1912)という書を著している。両者の貢献は、マーシャル経済学の現実への応用と経済学における統計的手法の開拓である。両者ともイギリスにおける賃金と物価の歴史に関する研究からスタートし、応用経済学や統計

の分析手法に貢献している。本研究では、彼らの統計学方法論からマーシャル経済学の展開と応用の検討を行った。

レイトンは、マーシャルがケンブリッジ大学教授を引退後に講師になり、応用経済学の講義を担い、統計学的手法を取り入れた『物価研究入門』(1912)という書を著している。その著作はプライスにより高い評価を受け、彼の学問的名声を高めることとなる。その後、彼は統計資料を新しくし、修正を加えながら4版まで版を重ねる。彼の『物価研究入門』についてマーシャルの「一般物価変動の救済策」ならびに「労働委員会」での彼の発言等をもとに当時の時代背景、歴史的資料を数字と統計で表現したものが、レイトンの『物価研究入門』であることを明らかにしてきた。

両者の統計学方法論を考察することによりケンブリッジ学派の創設者として手法現代の経済理論の基礎を構築したマーシャル像とは違い、応用経済学に関心を持っていたマーシャル像を明らかにすることができた。

3. 研究の方法

(1) レイトンの『物価研究入門』とマーシャルの継承性の検討。

マーシャルの初期の論文である「統計のグラフ的方法」(1885)「一般物価の救済策」(1887)とそれらとの関係をまとめたマーシャルの『貨幣信用貿易』とレイトンの主要著作の関係が重要となってくる。そこで、マーシャルの統計学への考え方・統計学方法論を明らかにすることによりレイトンとの継承関係を明らかにした。

(2) ボウレイの著作目録の作成

申請者は、レイトンの著作目録はすでに作成済みであるが、ボウレイのものに関しては未完成である。ボウレイが死去したときに、R. G. D. Allen と R. F. George が追悼評伝を書き、同時に作成された *Journal of the Royal Statistical Society* に著作文献目録を作成しているが、彼の業績すべてのものを網羅されていない。そこで、LSE図書館のボウレイ文書の調査により、彼の著作目録を完成させる。そのことによりボウレイの経済学・統計学の体系を明らかにした。

(3) ボウレイの統計学方法論の研究。

ボウレイの著作である『統計学要論』(1901)、『統計学入門』(1910)、『一般教養の純粹経済学』(1913)、『経済学の数学的基礎』(1924)をもとに、彼の統計学方法を考察することにより、ボウレイが社会科学とくに経済学への適応をどのように考えていたのかを明らかにした。

(4) ケンブリッジ学派の検討

マーシャルは、ケンブリッジ学派の創設者として現代の経済理論の基礎を構築した人

物であるが、応用経済学の分野にも関心を持ち、自らの経済学の体系において重要な足跡を残している。この分野の継承者として、レイトンやボウレイが存在する。マーシャルの経済学体系とケンブリッジ学派との関係を明らかにした。

4. 研究成果

(1) レイトンの『物価研究入門』とマーシャルの継承性の検討。

レイトンの研究に関しては‘Layton on industrial and applied economics’ という論文が掲載されている T. Raffaelli, T. Nishizawa, S. Cook 編集の *Marshall and Marshallians on Industrial Economics*, Routledge, 2011 が出版された。本論文ではケンブリッジ学派におけるレイトンの位置づけを行い、彼をマーシャルの経済理論を現実に応用した人物であることを明らかにした。統計という分析手法によるレイトンの『物価研究入門』は、ケンブリッジ学派において異質な業績のように見えるかもしれない。しかし、彼の著作はケインズの『インド通貨と金融』(Indian Currency and Finance, 1913年)よりも早く出版され、マーシャルの経済学方法論を踏襲し、当時の重要な研究テーマでマーシャルが十分に具体化できなかった応用経済学の業績であることを明らかにした。統計学方法論に関して、レイトンがマーシャルから帰納的な研究方法を学び取り、当時重要になりつつあった統計分析を推し進めたことも明らかにした。これらの考察によりマーシャル経済学における応用経済学的な側面にも注目する必要性を主張した。

(2) ボウレイの著作目録の作成

ボウレイの研究を行うため、著作目録の作成を行った。平成22年2月、23年3月にボウレイが統計学の教授を務めていたLSE(ロンドン大学)にボウレイのコレクションが存在するので、資料調査を約1週間ずつ行った。この資料調査により著作目録をR. G. D. AllenとR. F. Georgeが作成したものよりも完成度の高いものにすることができるとともにボウレイの体系について理解を深めることができた。また、ボウレイの著作目録に関しては今後公表を予定している。

さらに、ケンブリッジ大学の大学図書館で、ボウレイとレイトンとの資料調査を3日間行った。ケンブリッジにおける両者の貢献について研究を進めることができた。

(3) ボウレイの統計学方法論の研究

平成23年12月に神戸大学で開催された経済社会学会西部部会において、「マーシャルとボウレイの統計学方法論」というタイトルで報告を行った。本報告では統計学の歴史において、マーシャルやボウレイの統計学に注目する必要性を指摘し、ボウレイはマーシャル

の影響を受け社会改革との関連から経済学に関心を持ち、統計学的手法を経済学の分野に活かした開拓者であることを明らかにした。さらに、両者は貧困問題の解決に関心を持ち、統計学の重要性と経済統計学の発展の認識を共有していたことも論じた。両者の相違点は、統計学方法論において明らかになるが、マーシャルは帰納法と演繹法を一体のものと考えているのに対して、ボウレイは分離するものと考えていることを指摘した。両者の方法論の違いは、経済学者マーシャルと統計学者ボウレイの違いであることを示した。さらに本報告を発展させて、平成24年9月に開催される経済社会学会全国大会での報告のためのワーキングペーパーの作成と学会誌への投稿を準備している。

(4) ケンブリッジ学派の検討

これまでの研究成果をまとめたものを、大阪府立大学に学位請求論文『初期ケンブリッジ学派研究』を提出し平成22年2月に学位が認められた。この博士論文は平成22年5月に大阪府立大学学術情報リポジトリに掲載されている。掲載のURLは次である。

<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10466/10454/1/2010900032.pdf>

本研究は、マーシャルの経済学とレイトンの経済学を考察することにより、初期ケンブリッジ学派における応用経済学的側面を明らかにするものである。ケンブリッジ学派の研究においては、一般に、マーシャル経済学の流れを継いだピグーやケインズの理論的側面が強調されがちである。しかし、マーシャル経済学には理論的側面と並んで応用経済学的な側面が存在し、後者の側面の研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。そこで、マーシャルがケンブリッジ大学経済学教授に就任してから彼が20年近い歳月を費やして創設した経済学トライポス(卒業試験)から生まれた経済学者であるレイトンを取り上げることにより、マーシャルの応用経済学的側面を考察した。

レイトンは、マーシャルの講義を受講し、さらに彼の引退後には応用経済学を引き継ぎ、ケンブリッジの学生たちに教育を行った。レイトンを考察することにより、ケンブリッジ学派の形成過程ならびにマーシャルの経済学的課題や彼が十分体系化できずにレイトンが深化させたもの、さらにはピグーやケインズとは異なるケンブリッジ学派における応用経済学という分野の特質が明らかになった。

さらに、ケンブリッジ学派研究に関して「マーシャル、ピグーとケンブリッジの経済学者」(水田健・喜多見洋編著『経済学史』ミネルヴァ書房、2012年)がこれまでの研究成果として出版された。

本稿では、マーシャルの時代背景と当時の課題を明らかにし、彼の経済学体系について彼がその問題にどのように取り組んだのかについて理論面からと思想の側面から考察を行った。さらに、ケンブリッジ学派の展開としてピグーの厚生経済学とその批判を取り上げ、マーシャル引退後のケンブリッジ学派の展開についても論じた。このことにより、ケンブリッジ学派の形成と展開を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計4件)

①Masashi Kondo (discussant)

Carlo Cristiano, University of Pisa, 'Marketing, production knowledge, and innovation: a Marshallian perspective on post-Coasian theories of the firm', International Workshop: Cambridge Approach to Economics: History and Legacy, Florence, 21, March, 2012.

②近藤真司「マーシャルとボウレイの統計学方法論」, 経済社会学会, 西部部会, 2011年12月3日, 神戸大学経済学部.

③近藤真司「マーシャルの複合的準地代をめぐって」, 近代経済学史研究会, 2011年4月24日, 関西学院大学梅田キャンパス.

④近藤真司「マーシャルの有機的成長論」, マルサス研究会, 2010年7月9日, 明治大学.

[図書] (計3件)

①近藤真司「マーシャル, ピグーとケンブリッジの経済学者」, 水田健・喜多見洋編著『経済学史』, ミネルヴァ書房, pp. 187-205, 2012年.

②Masashi Kondo 'Layton on industrial and applied economics' T.Raffaelli, T.Nishizawa, S.Cook, *Marshall and Marshallians on Industrial Economics*, Routledge, pp.181-196, April.2011.

③近藤真司「ウォルター・レイトン」, 平井俊顕編著『ケンブリッジ学派の社会哲学』, 日本経済評論社, pp. 181-202, 2009年7月.

[その他]

近藤真司『初期ケンブリッジ学派研究』,

2010年2月, 222ページ.

学位請求論文(大阪府立大学)

大阪府立大学学術情報リポジトリ

<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10466/10454/1/2010900032.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 真司 (KONDO MASASHI)

大阪府立大学・経済学部・教授

研究者番号: 50264817